

【弁証法を学ぶ】 第42回

レポートにしろ卒論・修論にしろ、研究には何か新しい〈内容〉の発見がある。研究が進むとテーマを超えて、なぜ真理が発見できたかという研究のやり方、つまり〈方法〉に意識がいくようになる。

60歳代後半以上の世代だと、マルクス主義への関心から弁証法に興味を持った人が多いようだ。エンゲルス『空想から科学へ』をきっかけに、レーニン『哲学ノート』の影響から、マルクス『資本論』を読みつつ、ヘーゲル『小論理学』を読み始めるような道筋である。これに、スターリン『弁証法的唯物論と史的唯物論』や毛沢東『矛盾論』など、ある種の「単純化」された「わかりやすい」主張の「影響」を受けた度合で理解がちがってくるようだ。

いま大学で、また教職課程で弁証法が話題になることはほとんどない。文化継承の断絶がすでにおこっている。興味がある学生がいるとして、どうい

学びの道筋を提案できるか。

まずは、プラトン『パイドロス』で、相手を説得すれば真理はどうでもよい弁証法と、真理を明らかにする弁証法は決定的にちがうこと、〈多〉から〈一〉を分析によつて明らかにし、〈多〉へ総合する弁証法が提起されたことを学ぶ。

次に、文献①で、〈可能態（デユミナス）〉と〈実現態（エネルゲイア）〉で、意識や感覚、能力などを研究している例を〈経験〉する。真理とくいちがってくる違和感も味わいたい。

そして、文献②だろうか。ヘーゲルの弁証法が、〈関係Verhältnis〉と〈関繋Beziehung〉によつて成り立っていることが〈経験〉できる。（研究部・加藤聡一）

生活教育
eye

参考文献

- ① アリストテレス（桑子敏雄訳）『アリストテレス 心とは何か』（講談社学術文庫）講談社、1999年、68ページおよび解説。
- ② 三枝博音『ヘーゲル・大論理学』（こぶし文庫）こぶし書房、1996年（原著・河出書房、1968年）、25、191、163ページ。